

湖畔の菊・概要と解説

安曇野史伝（戦国武将）

こ い わ も り ち か
小 岩 盛 親

著者 木 口 大

この小説は、信州安曇野の物語である。

武田信玄率いる三千の軍勢を相手に、五百足らずの兵を持って善戦した小岩嶽城主小岩盛親の生涯を、史実に基づいて書き下ろしたものである。

写真の位牌には、當寺開基と印し

右に真晴院殿前図書小岩盛親大居士

左に青原寺殿前兵部安曳盛康大居士と印されている。

勿論小岩盛親父子の位牌である。



1. 初代小岩嶽城主について

初代小岩嶽城主については諸説ありと曖昧なまま語られ、公の資料には「古厩氏」とされてきました。

私は、そのことに疑問を持ち郷土史等を精査していくと、初代城主は、やはり仁科氏の嫡流である仁科盛親（後の小岩盛親）であることが分かりました。以下に郷土誌の一部を引用し、古厩氏ではない理由とその根拠を述べます。

イ) 当時、古厩を含む安曇一帯（南北安曇郡）は仁科氏の配下に置かれ、古厩氏も仁科氏の支族の出であるが、仁科氏の配下であったこと（家来）。

ロ) 小岩嶽城は、戦国時代の中期（1522年頃）に建てられたもので、その目的は、街道の宿城とはいえ、戦を想定した山城であり、仁科氏にとって戦略的に重要な拠点である。その重要な拠点となる城主には、仁科氏嫡流の誰か（仁科盛親後の小岩盛親）を宛がうのが道理であること。

ハ) 信頼できる文献によると、・・天文21年8月の小岩嶽城の戦いは激戦で、城主は生害し、足弱婦女子五百余人すべて討ち取られた・・とあります、もし仮に当時の城主が古厩氏（平兵衛盛兼）ならば、城主は勿論古厩一族はこの時点で滅亡したことになる。ところが、その後、武田氏の支配の下で、

盛兼の嫡男古厩因幡守盛勝が小岩嶽城主になっています。ここに大きな矛盾が生じるのであります。

もう少し補足すると、

古厩氏が小岩嶽城主として登場するのは、武田軍との戦いに敗れた後のことで、古厩氏が城主になれたのには何らかの理由があった筈です。

それは戦前に武田方に服従（若しくは降伏）したのではなく、戦いの中で武田方から何らかの沙汰を受け、寝返ったのではないかと考えられます。それによって勝利を早めたことが、古厩氏への恩賞として、小岩嶽城が与えられたと考えるのが自然であります。その後、武田氏が滅亡し、天正 11 年に小笠原貞慶が松本城に復帰すると、古厩因幡守盛勝は松本城で誘殺され、その子、平三盛隆も細野で捉えられ殺害されたとあります。

なぜ、こうしたことが生まれたのか、貞慶は安筑両郡を平定するため、武田方に寝返った仁科一族をはじめ地頭たちを成敗しています。南安曇郡誌によると、古厩氏は、何れわが身にも及ぶことを恐れ、小笠原貞慶に反抗しようとして誘殺されたとあります。

このような状況からみて、なぜ今日まで古厩氏が初代城主とされてきたか、そこに様々な疑問が生じます。寝返ったという恥辱を隠ぺいするためか、地元の郷土史家によって、郷土史等編纂の際曖昧な表現を用い、古厩氏を初代城主と位置付けてきたのではないかと考えられます。

また系図にも諸説あって、何れも確たるものではありません。例えば、南安曇郡誌の一部には、渋田見氏系図を引く合いに古厩氏のことを述べていますが、そこには、古厩平兵衛盛兼が古厩氏の始祖と記述されています。

ところが版違いの別の南安曇郡誌によると、古厩氏は四世仁科盛国（持盛）の弟で、南安曇に勢力を伸ばした大伴治部少輔盛知の孫（若しくは子）である古厩因幡守盛晴が古厩氏の始祖とされ、盛晴には、盛兼、盛棟の二子がいたとされています。これらを比較すると、明らかに後者に説得力があります。

なお、渋田見氏については、当時の戦いで武田方に服従した一人であり、生島足嶋神社起請文にその名（渋田見源

介政長)を連ねています。明治以降、自己に都合の悪い部分は隠ぺいするといった当時としてはごく当たり前のことが、系図にも改ざんが加えられているとみることができます。

ニ) 松本市史には、「小岩岳城主小岩岳図書盛親は本来仁科氏系なれど、始終小笠原氏に対し、忠節を表したる者の如し」と印され、「城将小岩岳図書盛親以下戦死五百人なり」の記述が見られる。

小岩岳というのは、岳(嶽)そのものが、山城を指す通称名であることから、姓名としては、小岩図書盛親が正しいと思います。しかし、小岩という性の出所については不明であります。小岩嶽築城以前は、当地一帯は古厩であり築城後に小岩嶽という地名が付いたものと推察します。

ホ) 南安曇郡誌には、仁科盛胤の紹介文の中で「男盛親兵部と称す。小岩嶽城主となり、小岩嶽氏を興す」とあり、その先に「七世仁科盛国(盛胤)の男として、小岩嶽城主盛親」の記述が見られる。

へ) 小岩嶽城主の菩提寺とされる安曇野市穂高小岩嶽の青原寺には、盛親父子の位牌があり、位牌には當寺開基と印し、真晴院殿前図書小岩盛親大居士の名が刻まれている。

以上の資料をもとに地元長老の話を交え統合すると、初代小岩嶽城主は、小岩図書盛親(仁科盛親)が正しいと結論に至った次第であります。

このように一部郷土史等に、初代小岩嶽城主を古厩氏と曖昧なまま長く伝えられてきたことは誠に遺憾であり残念なことです。

2. 小説の概要と解説

小岩盛親は、平盛忠を祖とする安曇一帯を支配していた森城主（現在の^{もりたね}大町市）仁科盛胤の三男として、1497年明応六年（推定）に生まれた。以下に仁科氏の嫡流の流れを示す。

平盛忠-----仁科盛園-----盛房----- 持盛 -----盛直 ----- 明盛 ----- 盛胤

（参考） 平盛忠を一世盛国と称し、以下二世盛国云々七世盛国（盛胤）まで盛国の称号がみられる。

盛親の生まれた明応六年は、戦国時代への突入の年ではありますが、信濃にあってはそれより十数年前から戦国時代を迎えています。例えば応仁元年（1467年）京都で起こった「応仁の乱」では、信濃の武士も東西に分かれ、東軍には伊賀良（現飯田市）小笠原氏、諏訪上社、仁科氏などがこれに属し、西軍には府中（現松本市）小笠原氏がこれに応じています。しかし信濃国内にあっては、以前から内乱が続き、己の領土を守るのが急で、京都に参集したものは一人もなかったといわれるように、既にそのころから戦国時代に入っていたのです。

「解説」小笠原氏の分裂

府中小笠原と伊賀良小笠原の分裂は、家督相続に絡む内訌が直接の原因でした。嘉吉二年（1442年）小笠原政康の死後、家督を引き継いだ子の宗康と政康の兄（長将）の子持長との間で相続争いが起こります。持長は自分こそ、嫡子であると相続権を主張しますが、幕府はこれを聞き入れなかったため、両者の間で争いが起こりました。宗康は万一のことを考え、弟の光康に家督を譲り持長と戦いますが、宗康は戦死してしまいます。その後、持長と光康は対立を繰り返し、持長は府中に光康は伊賀良にあって、互いに牽制していくこととなります。両者の争

ここで、物語上小岩嶽築城に係わった重要な人物を紹介します。小説では山家兼光^{やまべ}として登場しますが、兼光の祖先は山家谷（松本市山辺）一帯の領主でしたが、六歳のとき、父光家は小笠原長朝との戦いに敗れ、自刃して果てます。この戦いには、西牧信道、仁科盛直も光家とともに戦っています。（この戦いを高瀬河原の戦いという）兼光は光家の遺言に従い、森城主仁科盛直を頼って逃げ延びていきます。盛直の弟明盛は、ひと目見て兼光を気に入ると、嫡男盛胤と兄弟のようにして育てます。兼光は、その恩を終生忘れず、小岩嶽築城の際、盛胤の命に従って古厩平兵衛盛兼を事故死に見せて殺害します。

「解説」高瀬河原の戦い

文明十二年、府中小笠原長朝の節度に反発した、安曇の仁科盛直と西牧満兼は、山家光家と同盟を結ぶと、長朝と戦いを起こします。この戦いは、応永七年（1401年）の大塔合戦以来の激戦となりました。高瀬河原に陣取った仁科盛直軍と長朝軍は壮絶な戦いを繰り返しますが、西牧満兼が降伏すると、盛直もお家存続を願って、和睦を申し入れます。長朝は和睦を聞き入れると盛直を所払い、跡目を弟の明盛に継がせます。さらに長朝は娘を明盛に嫁がせると小笠原の配下に置きました。この戦いには、諏訪上社の惣領家諏訪政満も山家光家を助けるため府中に出兵しています。

小岩嶽城主となった盛親は、信濃の守護小笠原長棟（一四九二年生）に認められ、長棟の右腕として活躍します。盛親と長棟の親交も深まると長棟の願いもあって、長棟の嫡男長時の嫁として盛親の兄、森城主仁科盛能の娘を嫁がせることとなります。以下に小笠原氏の嫡流を示す。

小笠原義清----- 貞宗 ----- 政長 ----- 長基 ----- 長秀 ----- 持長 ----- 清宗
-----長朝----- 貞朝 ----- 長棟 ----- 長時 ----- 貞慶（小僧丸）

さて、この縁談が引き金となって仁科一族に賛否の両派が生まれます。城主盛能を支持するものは賛成を、弟盛明を支持するものは反対します。その結果、盛能は殺害されます。対立した仁科一族も、その後盛能の跡目を継いだ盛明への盛親の忠告もあって一つにまとまり、小笠原支援の道を選びます。

ところが、長棟の跡を継いだ長時の采配に不満を持つ領主や家臣が続出し、天文十七年の塩尻峠（正確には勝弦峠^{かつづる}）の戦いでは武田軍に惨敗をしてしまいます。さらに武田軍は、村井城に馬場民部信春を城代に据えると、府中林城攻撃の準備に入ります。

「解説」塩尻峠の戦い

天文十七年二月、村上義清との上田原の戦いで、武田方の将、諏訪上原城代板垣信方が亡くなったのを機に、それまで武田に抑えられていた諏訪下社の西方衆（矢嶋、花岡等）は、府中小笠原に支援の要請をし、諏訪奪回を図ります。長時は、凡そ一万の兵を率いて塩尻熊井城に陣取ると、今井四ツ屋（現岡谷市）付近で武田信繁軍と三日間戦います。長時軍の先陣を受けた仁科盛明の功もあって下諏訪城を陥れると、信繁軍を桑原城へ撤退させていきます。盛明は、下諏訪城主を望みますが長時はこれを拒否し、さらに武田晴信上原城に入城の噂が入ると、塩尻陣屋に引き揚げてしまいます。これに落胆した仁科盛明は、長時から離反し仁科に帰ってしまいます。その後武田の将小山田信有の策で、長時の家臣、三村長親、西牧信道等が武田方に寝返ると、形勢は一変し、長時は

熊井城を捨てると府中林の館に逃げ帰ります。この戦いで、長時の重臣草間時信等多くの家臣が討ち死にしています。この時の采配を長時は、長時一生の不覚と後々まで悔んでいたといえます。

天文十九年の正月、府中小笠原長時から盛親へ支援の要請が届きます。全軍林城に結集し、武田軍と戦うという内容です。これを受けた盛親は、万一のことを考え、妻や親類に災いが及ばないように、妻を離別すると、後のことを穂高の商人井口帯刀に申し渡しをします。

「解説」

妻を離別した理由の一つに三年前の志賀城での戦いで、武田晴信の敵兵への扱いが上げられます。破れた志賀城主の妻は、妾の身となり、女子供は人身売買されるといった残忍な仕打ちがあります。それを案じて妻を離別し親類縁者に被害が及ばないようにしたものでしょう。また、南安曇郡史、松本市史には以下の文章がみられます。

・・今度こゆわたけをひきはらい罷越候、然間等々力の内を、ちのさこん（茅野左近）一跡女子ゆづりにて候處、女子里別候條、此末者刀帯に出候、仍如件、・・

この文書は、小岩嶽城を引き払い、主君長時の籠る林城に向かう時に井口帯刀宛てに書いたものと考えられます。しかし、その人物がだれかははっきりしませんが、おそらく城主小岩盛親であろうと推察します。刀帯とは井口帯刀のことであり、井口帯刀については、天文六年に仁科氏の命で穂高に問屋を開いたとあります。

天文十九年七月、小岩盛親は五百の兵を従えて林城に入ります。林城には長時配下の兵を加えると、八千の兵が集結しました。ところが、武田軍の参謀馬場民部信春の策に乗り、長時の家臣の中には武田方へ寝返るものがあって、

戦況は一変し、長時は止む無く林城を捨て、桐原織部等十数名の家臣に守られ村上義清を頼り、砥石城へと逃げ延びていきます。

「解説」府中林城陥落

先ず深志城代坂西太郎が武田方に降り、続いて島立、浅間（赤沢）等が降ります。その上、西牧、三村、山家等が武田方に味方したとあります。それに対して、小笠原長時に従った家臣では、丸山、犬飼、平瀬、刈谷原、桐原の各氏と小岩盛親が上げられます。桐原氏は叔父の坂西氏に武田に付くよう説得されるが、これを断ったとあります。この戦いは、林城の前衛ともいわれる、埴原城の攻防が中心となり、城主泉石見^{いわみ}が討ち死にすると、長時は林城を捨て、桐原織部らに守られ砥石城に逃げ延びていきます。

その年の十月、武田軍は砥石城攻撃を試みますが、大将以下総崩れの結果となり（これを砥石崩れという）、負傷した晴信は甲斐へ引き揚げていきます。これをみて村上義清の支援を受けた長時は、再び府中奪回を試みますが失敗に終わり、家臣二木豊後守重高の籠る中塔城へ逃れていきます。（この戦いを野々宮合戦という）

「解説」野々宮合戦

天文十九年十一月、小笠原長時は、林城の戦いで寝返った家臣たちを降伏させると、小岩盛親をはじめ、安曇の将兵を従え氷室付近に陣取ります。葛尾を発った村上義清軍が塔の原に到着すると、それを合図に小笠原軍は渚口から深志城大手門を、村上軍は宮淵から北門の搦め手を攻撃します。戦力に勝る小笠原、村上連合軍の前に、武田軍は敗戦濃厚となります。ところが、晴信下諏訪に来着の噂が流れると、村上軍は突然引き揚げてしまいま

す。そのため長時軍の中には武田方へ寝返るものも現れ、一夜明けると千人足らずの兵となり、戦況は一変します。勢いを取り戻した武田軍は、離反した西牧信道を先導役に野々宮まで長時軍を追撃し、壮絶な戦いを繰り広げます。さらに晴信深志入城の知らせに、府中奪回の夢を断たれた長時は、二木重高の中塔城へと逃げ延びていきます。この戦いで、犬飼大炊守政徳等多くの重臣達が戦死しました。野々宮というのは、現在の松本市梓川倭付近を指します。

その後、中塔城に籠る長時軍と武田軍の攻防が始まりますが、長時軍の中には武田方へ離反していく者が後を絶たず、晴信の攻撃の矛先は、平瀬義兼と小岩盛親に向けられていきます。

天文二十年十月二十二日、原美濃守虎胤、飯富兵部虎昌率いる武田軍は、二千の兵を持って平瀬城を攻撃します。壮絶な戦いの末、城主平瀬甚平義兼をはじめ城代丸山兵庫守盛高等が討ち死にしました。

この武田の動きに、盛親はいち早く籠城覚悟で水路の警備と穂高周辺の豪族達に協力を要請します。しかし殆どの者は見て見ぬふりで協力を拒んでしまいます。

その中であって、義理の父、矢口備後守知光は二百の兵を小岩嶽に送ります。さらに離縁した妻の口利きもあって、穂高細萱の領主、等々力定厚は武器弾薬の類を小岩嶽に届けてくれます。勢いづいた小岩軍は、原美濃守虎胤率いる二千の軍を破り、深志へと退散させます。

年が明けた天文二十一年五月、再び武田晴信率いる四千の大軍が小岩嶽攻撃を開始します。しかし、三方山に囲まれた自然の要害をなす小岩嶽城を陥落させることは難しく、味方の犠牲が多くなることを察した晴信は、原美濃守

虎胤と春日虎綱の二人を呼び付けると、百姓でもだれでもよい味方にして、水源の在りかを聞き出すことを命じます。

ある日虎胤は、川で洗濯をしている老婆を見つけると、甲斐の話や身の上話などを聞かせます。初めは警戒していた老婆も次第に打ち解けてきました。そして、老婆が漏らした三十年前の古厩平兵衛盛兼の事故死の話から、虎胤にある考えが浮かびました。

盛兼の事故死は、仁科の策略だったとの噂を村人に流すことを思い付きます。その噂が盛勝の耳に入れば、盛勝は武田に寝返るだろうと、だが、噂をどうやって籠城中の盛勝の耳に入れるか、話し合った結果、全軍小岩嶽を引き上げることにしました。

武田軍の突然の引き上げに不審をもった盛親は、古厩の様子を探らせるため盛勝を里へ帰します。

噂は三日後、家臣から盛勝の耳に入りました。父は事故死とだけ聞かされてきただけに、盛勝の心は動揺します。父の菩提寺を訪ねた盛勝は、母にそのことを正します。しかし母は、たとえそのような風評が流れようと、決して盛親様を裏切ることはなりませんと厳しく伝えます。だが盛勝の心は盛親さへ遠い他人のように思え、武田方に寝返る決断をします。

小岩嶽城に戻った盛勝は、盛親の目を避けるように秘密とされた水路を打ち壊しにかかります。それを阻止しようとして立ちはだかる茅野左近、左近を取り囲む十数名の盛勝配下の侍、それを見届けると、盛勝は古厩に陣取っている春日虎綱の下へと走ります。

全身傷だらけで山を下りてきた左近から盛勝の裏切りを知らされます。一方鼠穴城に陣取った土屋十郎盛俊は、春日虎綱軍の中に古厩の旗を見つけると、小岩嶽が心配になり盛親のもとへと獣道を走りますが、敵の攻撃のため瀕死の状態で盛親の腕の中に倒れ込みます。

「解説」茅野左近について

茅野左近もしくは、千野左近の出所について説明します。千野左近は、前述の解説にみられるように、郷土誌では穂高等々力の領地の所有者とされていますが、出所については明確ではありません。そこで小説では、諏訪惣領家諏訪政満一族に属していた千野氏が、何らかの事情で（高瀬河原の戦いで、府中へ出兵した一人として）千野氏の遺子が（左近の父親）細萱に養子として迎えられ、その後等々力に引っ越してきたと想定しています。千野氏の遺子の子が左近で、盛親の側近として登場します。これは、前述の解説・・今度こゆわたけをひきはらい・・の文書の差出人を小岩盛親と考えての設定です。

水を断たれて一週間後、それまでの規律は破れ城内は騒然となります。左近と十郎の両翼を失った盛親は、最後の決戦と、残った百足らずの兵を率いると武田軍に向かって突撃を開始します。その中には女子供の姿もありました。この急襲に、虎胤軍は攪乱され城下へと退去していきます。盛親は、数名の家来とともに物見櫓までくると、武具を外し自刃して果てます。五十五年の生涯でした。

その後の小岩嶽城は、古厩因幡守盛勝が引き継いでいくこととなります。盛勝の心の中には、亡き盛親の影がいつ

までも離れなかった。一度の迷いからの裏切りが、己の人生を狂わしたことへの懺悔である。

母に伴われ、盛親の妻のもとを訪ねた盛勝は、ただひたすら己の過ちを詫びた。

永禄四年、美濃の国龍泰寺から蘭怒和尚を招くと、城の北側に盛親、盛康親子の菩提寺を建て永年の供養を誓った。

天正十一年、松本に復帰した小僧丸こと小笠原貞慶は、母江間の方から小岩嶽落城の経緯を聞かされ、信濃統一のため武田方に寝返った仁科一族をはじめ、盛勝とその子盛隆を成敗すると、盛親父子の墓前に手を合わせ信濃の安泰を誓った。

「解説」小笠原貞慶について

小笠原貞慶は、1545年（天文十四年）に長時の三男として生まれた。母は、仁科盛能（盛明）の娘といわれます。

六歳のとき、武田軍に敗れ父長時に従い、川中島に落ち延びた以降は諸国を遍歴します。天正三年頃から織田信長に属すると、諸国をめぐる小笠原家再興のため奔走します。天正十年信長が本能寺で殺害されると戦国期の様相を察した貞慶は、徳川家康の武将石川伯耆守数正のとりなしによって家康の配下となり、これにより府中小笠原家は安定をみた。そして、家臣団の育成とその支配に熱意を注ぎました。その表れが、武田方に寝返った家臣や領主など反小笠原勢の征伐にみられます。

「あとがき」

落城の直接的原因となった水路の取り壊しについて補足すると、水路は約一キロ先にある富士尾山から木管を使って引き込んだものとされています。老婆が漏らした「なんでも仁科の殿様に殺されたという噂があったほどじゃ」にヒントを得た虎胤が、古厩の里人に本当のここのように流したのも、それを耳にした盛勝が水路を断ったのも、古厩氏がなぜ戦いの中で武田方に寝返ったかという理由付けであり、地元民の感情に配慮し、創作したところがあります。

また、一部郷土誌には、この戦いは骨肉の争いとも記されていますように、秘密とされた水源をめぐり兄弟または親類縁者の中から、何らかの裏切りがあったのではないかと考えられます。

川で洗濯していた老婆が、褒美に目がくらみ盛兼殺害の噂ではなく、水源を教えてしまったという話もあるように、老婆の実像がだれか、そこには内部事情に詳しい人物が絡んでの戦いであったことが想像されます。

武田晴信の戦略の中に、敵方の裏切りを誘って勝利していくことが多くみられるように、小岩嶽城の戦いにおいても、あの手この手を使って、離反者や裏切り者を誘発していったものと推察します。

何れにしても小岩嶽城の戦いは、老婆に見られるように人間臭さと相まって決せられたものと思います。

2015.12